

テレックス

野瀬 隆平

アンカラの市内にあるホテルに戻り、フロントで部屋の鍵を貰おうとしたら、一緒に一枚の紙を手渡された。紙にはローマ字が打ちこまれていた。本社からのテレックスである。

attention mr r nose, ihi am300 22 nd onnanoko umareta boshi tomoni genki
congratulations
ospd

今から、50年以上も前の1970年（昭和45年）ことである。12月の初めに東京からトルコへ向けて飛び立った。長期になることが予想される出張で、そのとき妻が二人目の子を宿していた。

この連絡は、12月22日の午前3時に、無事女の子が生まれたことを知らせるものである。こんな形で娘の誕生を知るとは。今夜は、一人で祝杯を挙げるか。最後にある発信元のospdは、所属する海外事業本部の略称である。

今日ならば、生まれたばかりの子供の姿をメールで見ることが出来るであろうが、当時はこのようなローマ字の文字列で知るしかなかったのだ。勿論、国際電話も出来ただろうが、お金もかかるし、仕事でどこにいるのかははっきりしない相手を東京で捕まえるのは難しかった。

プライベートな連絡は稀にしかないが、仕事上のやり取りは全てこのテレックスに頼っていた。まとめて送信した方が安いのと、仕事の合間に電文を作っておいた方が時間の節約にもなるので、報告すべき文章は予めテープに穴をあけて取っておき、一日の終わりに機械に読み込ませて送っていた。

微妙なニュアンスを含む内容も、ローマ字の羅列で表わすしかない。長い割には伝えられることは限られる。そこで、出来るだけ少ない文字数で書くことが料金の面からも要求される。その為に、よく使う用語は略して書くことになる。

例えば、「……の件」はNKN、「問題」はMND、「関係」はKNKなどのように、主として母音を省略することが多かった。

最近、新聞を見ていたら、近ごろの若者はSNSなどで文章を綴るときに、「了解」を「り」、「気まずい」を「きまZ」と略するという記事が出ていた。

同じようなことをするものだと、半世紀以上も前のことを思い出していた。